

子規全集

第十五卷

俳句會稿



子規全集 第十五卷

俳句會稿

定價 參千八百圓

昭和五十二年七月十八日 第一刷發行

著者 正岡 子規ほか

編集表 正岡忠三郎

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽二一二二

電話 東京(〇三)九四五一一二二(大代表)

郵便番號 一二二 振替 東京八一三九三〇

印刷所 株式會社 精興社

製本所 大製株式會社

本文用紙 三菱製紙株式會社

©正岡忠三郎 一九七七年

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

俳句會稿

目次

明治二十四年		七
明治二十五年		九
明治二十六年		一〇
明治二十七年		一六
明治二十八年		二七
明治二十九年		四二
明治三十年		五三
明治三十一年		六二

明治三十二年 六五

明治三十三年 七二

明治三十五年 八七

參考資料 八三

解題 和田茂樹 八三

解説 寺田透 八四

凡 例

一、本巻は子規が参加した俳句會記錄を蒐集整理し、年次順に配列したものである。

原資料の所蔵は次の通りである。

國立國會圖書館 天理圖書館（天理圖書館本翻刻42號） 河野信一文化館 正岡家 高濱家（慶應大學圖書館寄託分を含む） 麻野家 内藤家 岡田（耽陽）家 岡田（利兵衛）家 本間（久雄）家 松字文庫 正宗寺

また『子規の第一步』（河東碧梧桐 俳畫堂 大正14・12・1刊）『明治俳壇埋藏資料』（麻野惠三 大學堂書店 昭和47・4・10刊）から、麻野家資料に原本を缺く分を補った。（各會稿の所蔵先は解題の一覽表参照）

一、句稿（一部詩稿歌稿を含む）に評點評語を記入した會稿は、そのまま翻刻した。ただし句の作者は規・虛等の略記を子規・虛子とした。また、前記『子規の第一步』により補った若干の語句はへん

で圍んで示した。

一、運座形式の會稿について

A 運座形式の句會稿は、通常

① 参加者の提出句をまとめて淨書した回覽句稿
② ①を回覽して参加者が選出した選句稿

が残されているが、①の各句頭にその句を選んだ會者の名の一字を選者印として付し、作者名を句の下に記して①②をまとめた。

B 選者印は原則として俳號の上の一字をとった。ただし二名以上が同字となる場合、各會稿冒頭に掲出した會者俳號に。印を付した字を用いた。（鳴雪、鳴球の如く）なお子規はすべて「規」とした。

C 選句稿の天・地・人・秀（秀逸）感（感吟）再（再考）再々（再々考）等の評語は選者印右（又は左）肩に付した。また。等がつけられた高點句について同様に選者印の肩に付した。

D 句の表記は回覽句稿に従い、選句稿で語句を變えて選んでいる場合は行間に傍記してその選者印を付した。ただし、漢字と假名、同音別漢字、假名の清濁などの違いは示さなかった。

E 一部の會稿末尾には、得點表、高點句一覽、高點者一覽などが記載されているが、これは省いた。

F 宿題・課題・運座の配列順は、原資料の綴じが前後していると思われるものについてもそのままとした。(當該個所編注參照)

一、各會稿の冒頭に日付、表題、會者をまとめて掲出した。これらが原資料に記載のないものの場合次の如くした。日付は、日記・隨筆・書簡・「東京俳句界」(「ほとゝぎす」所收)・俳句掲載新聞雜誌等の傍證から決定または推定し(推定日付は「」で圍む)、それが不可能な場合は、子規句の製作年次と句題の季節により、各年次の「日付不詳俳句會稿」として春・夏・秋・冬の順に位置せしめた。(句題の季節と句會の日付は必ずしも一致しない場合もあり、冬は年頭か年末かの疑義もあるが、假にこの處置をとった)表題は空白のままとした。會者は、句稿から摘出した。また全句會稿に通し番號を付し、日付下に記した。

一、作者名は各人選句の下に略記されたものにより句の下に記した。まゝ推定の場合は「」を施した。

また選ばれていない句で、他の資料から作者が判明する場合は編者の試みとしてこれを補った。子規句の場合「寒山落木」「俳句稿」と句型の異なるものは「*子規」と記した。

一、ごく一部に片假名書きの句稿があるが平假名に統一した。

一、校訂は本全集の基準によった。漢字表記については『俳句』の各巻と同じくした。(第一卷『俳句一』解題六〇三頁「(一)本文の表記1漢字表記」參照)

一、明らかな誤記、誤植は訂正した。

明治二十四年

日付 明治二十四年八月三十一日

表題 岸の細波

會者 子規(キ規 西子) 雪燈(武髦)

可全(可 黍坊) 虛子(清) 碧梧桐(青桐 秉)
極堂(木卯木) 黃塔(伽羅男)

連俳

可 あいさつを二度いふときやかりのこゑ 武

「あいさつはとぎれてそらに雁のこゑ」としては
いかにや(清妄言) 此句の方がいくらかよし(規)

まかき取りまく朝かほの花 可

秉 空も様二百十日のちかつきて 武

、清 秉 はいとのあとに犬のはへけり 可

奇態(秉)

表戸をびつしやりたてゝ夕の月 可

、規 「表戸を立てゝ氣の付くまどの月」(清多罪)
清君の句甚妙、可君以て如何となす(髦)

、規 舟のたよりのきかまほしさよ 武

かくの如き附句は我等仲間になし故に之を批す惜
むらくは表に戀の句あるを、若し戀の意ならねば
面白からず(規)

、キ 番頭も手代もよりて土用干 可

、清、可 羽おりたゝんで行く太鼓醫者 規

、清、可 小便を無用とかいた建札に 武

突然來而突如(清)

、清、秉 雀むれきてやとりもとめる 武

、清 またれけり復こむ春の花ざかり 武

こむとは如何なる意味なるや來ると謂ふ意か來ぬ
と謂ふ意か來ぬといふては天地は今年にてつくる
にあらず來年もさらひ年もあり春は毎年くるもの
なり嘗つ最初に待たれけりと謂われたるからには
來ぬといふては前後矛盾と思考す大方の諸君何と
おぼさるゝや(青桐子妄言) こむとはくるの意な

り 僕モ亦シカ存申候(髦) 勿論(キ)

八兵衛とのゝ妻は八十可

席上連俳 大至急

、乗髦規 萩の家の二軒ならひて秋のかぜ可全
、清乗髦 椽ばなでよむ雁の音信 木卯

大せがきほいとのならぶ門あけて 可全

此句妙は則妙也然レドモ連絡不明(キ)

、髦 隣にきこゆ尺八のこゑ 清

雲かゝる月のかけ行く秋の空 木

此句十分に解し不申(青桐) 髦亦青桐君ト同意。

雲かゝるの句亦句柄大によし然れどもこれまた附
句として少しいひたらぬ心地す(キ)

、清乗 かすむほとまで青田つらなる 武

夏ナリ前句の秋につどかず(キ)

、清 氏神の暮の太鼓のひゞきかな 武

、乗可髦 涙にて見る病人のかほ 清

、清、乗 雪陰のよこでこそく立話し可

、清

しぶ柿かんだ初孫のつれ 乗

―讀み得ず(キ)〔孫を指す〕

此句ハ面白ナカスト云フモノハ髦ナリ ドーシテ

モ「つれ」は「顔」トシタケレトモ残念(清)

、清乗 みのとかさこれぞ浮世のかくれば所 武

、乗髦 鴨立澤の夕暮の雨 清

鴨立澤ト云フテ自然ニ西行法師ヲ想ハシム妙甚ダ
シ(髦)

、清キ あいさつは笑ひですます隣どち 可

、清可キ 十時には來る手習の弟子 乗

青空をにらむで人のゆきもと 武

、乗可 極樂ちかし芝ふきの宿 清

、清 花見にてかへる娘も花のかほ 可

竹外翁ノ花似人人似人ト同意ニシテ更ニ輕妙只惜
ムラクハ最初五字缺妥ニ似タリ(髦) 此句だめ

だめ(キ)

、清髦 近頃になき宵焼の色 乗

此句ヨクモ附合セラレタリ感服(髦)

同上 大至急

、清、
、キ 桐の葉の落ちてさびしやまどのつき 可
、キ 盆を目當に賣る女郎花 乗

盆ノ字當時已ニ其非ヲ云ハレタレドモ之レヲ改メ
ラル、ノ暇ナキナリ(髦)

、髦 落葉吹くあらし雨戸を音つれて 清
古法ニテハ冬季ナリ(キ)

、清
、髦、キ 茶の間のすみでねすみとらへる 可
今日はまた居間一面の土用干 乗
匂わろし(キ)

二人見つけた簞の争 清

《簞は》「タケ」か、土用干に茸は如何(キ) 表六
句大不出來と存候さるに裏は割合によき様にて双
子織に絹八丈の裏をつけたる如し(秉)

、清 なき人の面かげうつる盆の月 可
此句もよろし只附合さだかならず(キ)

、清、可 野中の杉をまわるかはほり 乗
夏季ナリ(キ)

、キ 演習にけがの兵たいかいてきて 武

、秉、可 扱てと手をくむ藪醫者の癖 清

惟我に醫者をつけるは平凡(キ)

、清、可 清つもごりや隣りのかりに行きつまり 可
、清、可 淺瀬を渡る鹿の子こしまき 乗

此邊ノ句小生不解(規)

、清、秉、可 辻町はあんまゝと行き逢ふて 武
、秉 子に添へ乳のかゝのうたゝね 清

、清 隣りから垣こえてくる梨一つ 可

意はよし筆まわらず(キ)

、清、可 雨に破れし古寺の屋根 乗

、清、可 花あるに何でやつるぞ秋の蝶 武

是一個の發句として充分のねうちものなり(青
桐) 發句とするかたかへへつてよろし(可云)
これも亦句のあしきやうに覺ゆ(キ)

尙 友多し 雅客文人 清

《連俳總評》

句ハ則チ面白キモノ澤山アレドモ連俳トシテ見ル
トキハ其體ヲ得タルヤ否ヤト疑敷存ズ席上咄嗟ノ
作トハ云ヘ(髦) ヒヤゝゝ(規)

坐興難題盲吟

胡麻の實(發題者青きり)清秉
可キ

胡麻の實の大のけんくわにこほれけり 武

我れ當時胡麻の實を撰びしも今考ふれば闇の明月
の勝れる様に覺ゆ(青桐)闇の名月(可全)

秉可髦 小提燈ゆられて行くや墨繪月 清

終五文字讀みかねたり(キ)月下餅(清)

清名月や烏もち去る鏡餅 秉

蛇穴入(武)

山股の穴へごとりと氣車の蛇 可

不相變達者だねー ハ、ハ、ハ、ハ(キ)晝のかり(青きり)清秉
可キ

日蝕を横ぎりととぶやかりの竿 武

日蝕とはよくも思ひつかれたり(キ批 青桐)「日蝕にたまげて飛ぶかかりの竿」(可) ノー、(キ)雀はまぐりに成る(武)

清はまぐりは百になるまで雀哉 可

此句解したるが如く解せぬが如し 層霧暗(青桐) 御同意(髦) 又云、カクアリテコソ名句ト
申スベキニアラズヤ(髦)がらむすの梨(可)

秉かるやきの梨ひきあげて孫のかほ 清

案山子の吸物(清)

吸物と共にのみこむ案山子哉 秉

難題中難題(清) 余も此題にて戯れに「松たけ
やかゝしの薬をつとにして」こんな解きやうでは
まづ可全君不承知だろふ(規)秋のこえとり(可)清秉
可キ

こえとりの土産にくれぬ萩の花 武

此題ニシテ而シテ此句アリ感服(清) 適評
奇想(キ) 奇妙(可)鳥の入水(清)

可水あびる心鳥は鳥かな 武

句調面白けれども其意解せず〔清妄言〕

鶉の糞（乗）

我なみだ買ふや鶉のしりみやげ 清

鷹の山別れ（武）

山を出て大空にらむ鷹のこゑ 可

にらむト云ヒ聲ト云フ如何ニヤ（髦）

即席課題

〔可全稿〕

初しほ

、髦キ乗

初しほや濱の小松につなぐ舟

「初汐や帆檣もつる松の枝」（乗）

初しほや橋をくゞりて行く小舟

「橋いくつ初汐よぎる眞帆片帆」（あおぎり妄）

角力翁字むすび

、清髦乗

宮角力杖を忘れて行く翁

宮角力にトナシテハ如何（髦）

孫も子も翁もまじる宮角力

始めてよめたコレハムツカシイ（キ）〔孫の表〕

「子も翁も同じ勢や宮角力」（青桐）

角力いろはに四字結

、清キ 角力取り戀人に見せむはだの色。

鳴

、清キ 鳴なくや小みちをたどる歸り牛

「鳴たつや牛も一步を譲りけり」（青桐）

、秉清 鳴立ちて田面にのこる夕烟

「鳴たちて僧のぼんやり夕烟」（青桐）此句マサル

ガ如シ

鳴立ちて幕を吹きけり秋の風

「鳴たつた後に幕ふく秋の風」（青桐）青桐氏の

句も亦左程面白からず（キ）

以上にて幕、可全和尚再拜

追加 非宗匠

何事ぞあまのふせ家のふじばかま

即席課題

〔碧梧桐稿〕

ふじばかま

、清髦 一りんの中のゆかしや藤袴

藤袴はかたまりてさく花なり一輪といふことなし(キ)

初 汐

、清 初汐に二階から見る面白くなし
言や面白くなし

「初汐やかべこし見ゆる眞帆片帆」(可) 「初汐や
 二階からみる眞帆片帆」(清妄言) 「初汐や帆樫
 とゞく濱坐敷」(規)

、清 初汐に旅人ぬらす脚絆かな

初汐は此處ばかりかや眞帆片は

鳴

、清 鳴立つやくろうのかげに鉄一つ

少シ裂

鳴なくや西行を富士に上さなん

立つ鳴のなきこかしたる案山子哉

角力いろはに四字結

土俵場に立つ顔色やすもうとり

同翁字結

、可 宮相撲まけて翁の笑ひけり

、清 宮ずもう翁にいはる孫のかほ

附記博一聚

青ぎり

「相撲見や翁の面に似た親父」(キ) 能樂ノ翁ナリ

即席課題

〔雪燈稿〕

初しほ

、清 初しほや海のながめの廣ふなる
 、可

「初汐に淺瀬を渡るいざり哉」

、清 初汐や池の鯉鮒死んでけり

「初汐や海に餌ひろう鳶鳥」(青桐)

に(キ)

、可 初しほや浮む様なりあまの家

小生始め此句を解せざりしが或人の説を聞て始めて其面白みを解せり然れども一方より見れば潮のますにつれてあまの家は沈む様に見ゆるに非ずや
 (清) 「初汐や波からはへた夕烟」(青桐)

鳴

鳴立つや夕榮きへし寺のかべ

きへしきゆるニアラザレバ興味ウスキガ如ク存ズ
 諸兄教ヲ垂ヨ(髻) 「鳴たつた音に木魚のたへに

けり」

鳴の立つあとからくるや暮のいろ

「しぎ立つやあとをにごさぬ夕の月」

、清 鳴なくやしはし道づれまち合せ

「鳴なくやあぜ道通る高話」

、キ 鳴ないて秋の夕となりにけり

「鳴」こゑ二こゑはなくも哉」(青桐)

藤 袴

、秉 元信の掛物ゆれてふじばかま

解しかね候(規)「秋風や」としては如何 トシ

テモ如何ト存ズ(髦)

角力 翁字むすび

翁^〇でももとはさすかに角力とり

「今は翁もとはさすかに角力とり」

改作「今は翁昔をかたる宮相模」如何(キ)

、清 秉 角力喧嘩翁はいりておさまりぬ

「角力取の喧嘩おさめて翁哉」(青桐)

叱 正

武士雪燈

即席課題

〔虚子稿〕

藤ばかま

、秉 主ゆかし誰かぬきすてし藤袴

歌ヨリ來ル古シ(キ)「山奥にぬぎすてしこ

そ藤袴」

めすらしや浮世にそまぬ藤袴

「ひげ男のまき水やさし藤袴」(青桐)

初しほ

初汐や島の上行く遊び舟

「初汐につれて一里は上りけり」

、キ 初汐や忘れぞうりのゆらり(破(キ))

「初汐や草履とられた孫の顔」(青桐) 青桐君は

孫の顔が甚得手なりヒヤ(キ)

、キ 初汐や樓の下こぐ通ひ舟

鳴

、秉、キ 足本にしぎは立けり秋の暮

(キ)しぎ立つて何處へいそぐぞ秋の暮(青桐)

、鬚 柿落ちし音に鳴たつタかな

牛叱るの句あるを恨むのみ（青桐）然れトモ亦
別趣味ありとはうぬぼれ歎（清）「たつ鳴の忘れ
ものあり柿一つ」（青桐） トノ改ヨリハ原句ノ方
マサルニ似タリ（鬚）

角力 いろはに四字結

はだのいろはにひて雄々しすもふとり

同 翁字結

、可 乗
ひさご片手翁のおどる土俵かな

「まけ角力をかちといひ張る翁かな」

まけずもう翁のしはを顔によせ 失笑（可全）

、可（可）「此行司翁にたのめはれ勝負」

こどもより翁がきをう宮ずもふ

稍陳腐を脱する句なり（キ）「弱ふても名でもつ

翁の角力かな」（青桐）

角力とりて取てもらうや翁ぐさ

清再拜

追加、可「關取を顔であしろふ翁かな」

、清 乗

きぬた 國名三ツよみこみ〔可全稿〕
あき〇の月〇い〇つもあはれやさよきぬた
あ〇き〇あはれ夜〇ふけてち〇かい〇きぬた哉
き〇くま〇じと〇するが〇か〇ひ〇ない〇きぬたかな
兩句勉メテいの字を用ゆる耳立てり（清妄言）

同 題にて

、清 鬚

、清 乗

、清 鬚

、清 乗

、清 鬚

、清 乗

ねかへればいづこもきぬた秋のつき
きくまじとすればするほどきぬた哉
南かと思へば北のきぬたかな
秋風にたえてまた打つきぬたかな
きぬた打つ音にしづまる秋の月
秋風のそよ／＼吹きて遠きぬた

風のまに／＼あはれ打つなり

此下ノモノ歌ニナラズト思考ス（清妄言）／＼
あはれ打つなりトハ如何や僕ハ諸兄ノ明教ヲ祈ル
（鬚）

鶉

、清 乗

、清 鬚

うつすらと月にかさありなくうづら
秋雨のしづく氣になる鶉かな